

"Rewrite" epilogue (another)
"one more kiss, one more love."

それは、おおきな桜だった。

全高三万キロメートルはあろうかという桜が、直径一万キロメートルとすこしの地球に生え、三十八万キロメートルの虚空の向こう、黄金に輝くまんまるの月を目指していた。かつて鳳咲夜と呼ばれたその魔物は、星に残されたアウロラを養分として吸い上げ、その持てる力の全てを振り絞り、それは見る間に大きく膨れ上がりながら、まるで激しい感情を以て空に手を伸ばすかのように、薄桃色に彩られた枝をぎりぎりと漆黒の闇へと伸ばしていた。

比すれば細波にもならないが、その足元では、全高数百メートルの巨大な植物が、地上のあらゆる文明の痕跡を完膚なきまでに押し流し、消し去っていく。

もし、その地上から夜空を見上げれば、月に届かんとする常軌を逸した桜が見えたであろうけれど、俯瞰すれば、その枝は、花は、月には遠く届かない。道半ばとすらいえる距離ではなかつた。

おおお……いうまるで声が、真空の宇宙に響き渡る。

それは、まるで誰かが月に抗議をしているようにも聞こえた。

「■■——」

月はそう答えると、静かにその赤いリボンを伸ばした。

数十万キロメートルの隔絶をひらひらと越えて、月は、そのリボンで、ちよん、と桜の枝に、花に、触れた。

咲夜は目を見開き、何かを言おうとした——間に合わなかつた。

なぜなら、その瞬間、月から注がれたささやかなアウロラの波が、ほとんど一瞬のうちに、巨大な桜を薄桃色の粒子に変えてしまい、それは見る間に虚空に溶けて消えてしまつたのだ。

しかし、その足元では、たかだか全高数百メートルの巨木の波がまだまだ荒れ狂つている。

高層ビルが、住宅街が、学校や病院が、家が、町が、コンクリートや鉄骨が、きらきらと輝くガラスの壁が——ありとあらゆるものが、その波間に呑まれ、消えていった——。

大地は激しく鳴動している。

瑚太朗は、小鳥を抱きかかえて、降り注ぐ瓦礫や飛び散った巨樹の破片を何とか避けながら、

(これは一体——震度どれくらいなんだろうな)

そんなことを思った。場違いさに、思わず笑みがこぼれた。

付け加えるならば……これは自分たちがした事だ。

誰かに問われこそすれども、自分で問う資格はないだろう。

(まあ、その「誰か」なんて、もう誰も——)

——高層ビルの巨大な塊が斜めに降ってきて、瑚太朗は跳んだ。

無益な事を考えるのを、瑚太朗はやめた。

できるならば——誰に祈るのか——そんなに遅くならないうちに、自分の体が保つうちに、この地搖れが収まつてほしい。

one more kiss, one more love.

両腕に抱えた小鳥をアトリエの片隅の長椅子に寝かせると、それで全ては終わった。風祭の学院を追われ、オカルト研究会の皆が、一時はあの『魔女』ですら集つたこの場所には、しかし既に瑚太朗と小鳥の他に誰の姿もない。

ルチアも、静流も、ちはやも。

誰もが、ここからいなくなってしまったのだ。永遠に。

それでも、このアトリエが『森』に呑まれきらずにその原形を留めているのは、瑚太朗にとつては救いだつた。

一時はひどく騒がしかつた場所だが、随分と静かになつてしまつた。

だが、それとて構うまいと瑚太朗は思う。

考えてみれば、最初から瑚太朗には、小鳥のただひとりしかいなかつたのだ。

あの頃からは随分と遠いところまで来てしまつたが、一周回つて元のところに戻つてきたのだろう。

その遠い旅路のあいだに、少しはマシな人間になれたのだと思いたかった。

@

@

@

とにかく何かを食べなければならない。

そう考えたときに、突然、瑚太朗は自分が何もできないことに気づいた。食べやすいもの、スタミナがつくるもの、ほっとするもの……そんなことはいくらでも思いつくが、それを手に入れる方法はとなると、見当がつかない。

(豚肉……ホウレンソウ?)

だが、それらは要するに、スーパー・マーケットで売られている食材だ。人類は既に壊滅した。少なくとも人類文明はそうだ。

発電所が森の大海上に呑まれて、町から電気が消える瞬間を、瑚太朗は思い出した。それを瑚太朗は、ガーディアンのヘリコプターから見下ろしていたのだ。豚肉は常温では保たない。

とすると、肉を食べなければ――

(狩る、か。だけど)

瑚太朗の思考はそこで止まつた。

なにも、動物を狩ることに躊躇したわけではない。

だが、狩ったとして、その動物の死骸を食材にする方法を、瑚太朗は知らない。
それに、動物の肉は火を通さなければ食べられないだろう。

そしてここには、電子レンジもガスコンロも、なにひとつない。

(全部準備している時間はないか)

最低限でも、とにかく火を熾せるものを探す必要がある。

動物の解体を学んでいる時間はない。

実践で身につけるほかないだろう。

@

@

@

結局、狩つたのはイタチのような生き物だった。

最初に狩つたのはリスだったのだが、小さすぎるとまともに肉をとれない事がよく分かつた。

そのイタチも、まずは内臓がある身体や頭は避けた。腕と足を切り取り、皮を剥ぐと、トレイに入つてラップをかけられてスーパーマーケットで売られていた肉に近い印象になつてくる。

なるほど、生き物と食材は、こう違うのか……と瑚太朗は初めて納得した。

オーロラブレードは凄まじく鋭利だ。素人の瑚太朗でもなんとか、肉を切り出すことはできた。だいぶ不格好であるにせよ。

瑚太朗だつて、ここまで何とかなるだろう、と思っていた。

ここまで

@

@

@

アトリエの小屋に戻り、小鳥が横たわるソファがある部屋の前で、瑚太朗はそつと耳を澄ました。

僅かに聞こえた小鳥の呼吸には、どうやら起きているときの気配がした。
よし。

わざとらしくならない程度に、敢えて気配を隠さず、瑚太朗は部屋に足を踏み入れる。

「小鳥」

すこしだけ小鳥は身じろぎをして、ギン……とソファが軋む。

場違いな小鳥の甘い匂いが瑚太朗の鼻を衝いた。

「よく眠れたか？」

「ん……」

反応はあつた。悪くない。

が、これは慣れないものを食べられる状況ではないか。

肩掛け鞄から、カロリーメイトを取り出して、サイドテーブルに置いた。

「食べててくれ」

それが貴重なものであることは、小鳥だつてわかつていた。言葉を絞り出す。

「それは、瑚太朗君が食べてよ」

「俺は、狩りをしてきたから、そつちを食べるよ」

「狩り……？」

「ああ。たぶん、イタチかなんか」

すこし、小鳥は反応に困ったようだつた。

「おなか、壊さないでね。ちゃんと焼いて、内臓はとつて」

「分かってる。でも、もし何かあつたら頼むな」

「……」

「ちゃんと気をつけるつて。もしもだよ、もしも」

「……うん」

一応、そう言つてくれたことに、瑚太朗はほつとした。

小鳥は、獣の肉を喰おうとする俺を放つて寝込んではいられないだろう。
どんな理由であろうと、小鳥があのカロリーメイトを食べててくれるなら、今は何だつて
いい。

@

@

@

肉を捌く技能は、すぐに役に立つた。
予想もしない客人がやってきたのだ。

「ごちそうさまでした」

しまこがそう言つて手を合わせると、その横で井子さんが、「本当に、何とお礼を言つたらいいか……」

深々と頭を下げるのでは、瑚太朗はひどく狼狽えた。

「いや、そんな……頭を上げてくださいよ」

「私たち、もう三日も、きちんとしたものをしてなかつたんです」

「三日……」瑚太朗は絶句した。野獸の肉と素人の調理でも、それは美味しく感じるだろう。「大したお構いもできず」

場違いなフレーズに、井子は頭を下げたまま、目を見開いた。

それから、本当にこの青年は、お人好しなんだなあ、とばかりに、くすりと笑つた。

瑚太朗は「何なんですか……」と答えたが、井子の緊張が少しでも解けた様子を見て取
り、ほつとしたような口調だ。

井子さんが來た、といふと、小鳥もさすがに驚いたが、ソファから起き上がり、身支度をすると言ひ出した。

待つことしばらく、井子としまこ、それから瑚太朗の前に姿を現した小鳥は、少なくともここ数日間のそれと比べて、いくらか、シャキッとした様子だった。

それでも井子は、小鳥に何かがあつたのだと、すぐに、悟つたようだつた。

一瞬で言葉を選んだのだろう、

「神戸さん、よかつた、無事で」

くしゃりと、小鳥の顔がゆがんだ。井子は椅子から立ち上ると、立ち尽くす小鳥の背中に、そつと腕を回した。

やがて、井子の胸に埋めた小鳥の顔から、すすり泣くような声が聞こえてくる。

@

@

@

その夜。

太陽の下で動物たちが駆け回る昼と違つて、夜は虫たち、そして植物の時間だ。秋の虫たちの声もそろそろ少なくなつてくる季節だ。

聞こえてくるのは、植物たちが成長……いや、巨大化、肥大化する、ぐぐ……ぐるる……という、地響きめいた低く鈍い音、そして枝葉が生えて角度を変えていく、ざわ、ざわ……という不規則な存在感だ。

そのなかに、瑚太朗は、誰かの足音をみつけた。

しまこ……のようだが、ささやかな違和感があった。

違和感には注意を払うべきだ。瑚太朗は音を立てないようにそつと起き上がり、部屋の入口の方に向き直つた。

「少しはできるようになったわね」

そこには既に、その人がいた。

しまこである。少なくとも外見は。

だが。

「……朱音、さん？」

しまこ、いや朱音は、笑った。

「その通り。よく見抜いたわね。お久しぶり、天王寺。元気にしていたかしら？」

しまこ——の身体で話す朱音に、敵意は感じられなかつた。

それでも瑚太朗が大げさに肩をすくめるのには、いくらかの緊張があつたのだろう。

「見ての通りですよ。ドタバタもようやく全部終わつたんで、ピンピンします」

「それは結構なことだわね。小鳥と二人きりでよろしくやつているところに押しかけて、申し訳ない限りだわ」

瑚太朗は答えに窮して、笑つた。

「そうだつたらいいんですけどね。ま将来的に朱音さんが言うようなシチュエーションになつたら、ちょっと外してもらうことにしますよ」

「野暮はしないわよ」

しまこの顔で、朱音がやりと笑つた。

「微妙にこわいっすね、その顔は……とにかく座つてください」

椅子を勧めながら、瑚太朗は続ける。

「一体なにがあつたんです？ それに、その、朱音さんの……」

「本来の身体は、此花に消し飛ばされたわ」椅子にひょいと腰掛けると、一拍おいてから朱音は続ける「此花にはすまないことをしたわね。皆にも、お前にも」

「別に、朱音さん個人の、じやあないでしよう。でも——今、朱音さんがこうやつて話しているとしたら、『聖女』の呪いは、まだ？」

すつと、朱音の目が細められた。

「ねえ、天王寺。お前、この世界は今、どんなことになつてているのか、正確に把握して？」

「いいえ」

瑚太朗は首を振った。

「俺たちは……俺と小鳥がしたことは、朱音さんは？」

「理解しているわよ。『鍵』の抜け殻を使って、咲夜の力を暴走させた……『聖女』による世界の終わりを回避するためにね。あれは天王寺の発案？」

「はい」

「やはりね。神戸には、たとえ思いつけても口には出せない方法よ。お前にしては、よい判断だつたわ」

「それは……」

目の前の朱音が為そうとしたことを、止めるための手段だった。

それを朱音に褒められるのは、妙な気分だった。

『聖女』は——『聖女』だつた私は、この世界そのものが憎かつた。根源的な部分で『鍵』のいうところの愛に支えられた世界が。だから全てを壊してしまおうと思った。でも、お前は違つた

「そうです。俺が望んだのは、あらゆる現状変更の意思の破壊で——まさか」

そこまで言って、瑚太朗は絶句した。

「そう。恐らくは、お前なのよ。『聖女』の概念そのものを、あらゆる変化への意思とともに、この世界から消し去つてしまつたのは」

「私が消えなかつたのは、きっと、本来の私が怠惰過ぎたからね」
にやり、と朱音は笑い、その言い方に、瑚太朗は思わず苦笑いした。

「なんか、納得しますね、それ」

「でしょう？……いいのよ。自分でも納得感、あるし。私は所詮、鹿島桜の魂を移植するのに、ちょうどいい器だったっていう、ただそれだけなんだから」

「でも」瑚太朗は、ぽつりと呟く「会長は生き残った。……どうして、ここに？」
「ここに来たのは、井子としまこよ。私じゃない」

「俺に会いに来たのは？」

「ま……」

息を吐き、視線を瑚太朗から外し、ややあって。

「笑わないかしら？」

「もちろん」

静かに、明確に、瑚太朗が答えた。

そこに、恐らくは真摯さのようなものを受け取つただろう。

「私はね」

朱音の口が、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「私は、しまこに生きて欲しいのよ。私に似た子に、私と同じような運命を辿るのではなく、私とは違う、何にも縛られない生き方を……そのためなら天王寺、私はお前に協力してもいいと思っているわ」

@

@

@

ごうおおおお……ん……、と、遠い雷が鳴り、瑚太朗はほとんど崩れかけた建物の入口から、空を見上げた。

鼻には、濃厚な土のにおい。

どうやら一雨きそうな気配だ。

じつとりと湿った空気に、シャツが肌にまとわりつくのがわかる。

湿った服は派手な動きには向かない。

が、目的が廃墟——ほとんど森に呑まれてしまっている風祭市の無人のビル街——の探索である以上、脱いでしまうと、それはそれで擦過傷の原因になる。

どうしたものか、と瑚太朗は逡巡していたが、やがて腹を決めた。

(雨宿りだな……)

村に帰るのは、雨が落ち着いてからにした方がいいだろう。
どうせ雨では畠仕事はできないのだ。

それに、どうやらここは、探索しがいのある場所の臭いがする。

瑚太朗は、目の前の巨大な構造物を見上げた。

ここはガーディアン極東教区風祭支部の、隠匿された基地だつた場所なのだ。
食料。それとも、魔物なり超人なりに関する調査、または……研究、の記録。
それは、これから自分たちが生きていくための、貴重な知識であるはずだつた。

電気が通つていた。

△破滅△のあとにあつて、それは完全に異常な事態だつた。

(――どういうことだ?)

暗闇の中にぽつかりと浮かび上がる非常灯

ガーディアンの擬装軍事拠点、風祭第二支部 N106 棟、その地下百メートル。階数にす
れば二、三十階にはなるだろう。

建物自体は十階建て程度だから、明らかにこの構造物の本体は地下にある。

そしてもちろん、その地下百メートルに至る、研究室の群の合間を縫うように走る迷路のような通路には、人の気配もなく、機械の気配もなく、火や電灯の明かりのひとつもなかつたのだが……

しかし、エレベーターの縦坑の非常梯子を降りて、その最下層に降りたつた瑚太朗の目の前に、その緑色の非常灯は、まるで場違いな様子で、ぽつりと、静かに、しかしあつたりと輝いていた。

非常口の、ドアから逃げ出す人のピクトグラムを眺めて、瑚太朗はそつと息を吐いた。

(逃げたすべきなのかも知れないけど)

——だが。

(逃げ出す先なんて、ないか)

そう。そもそも、この場所は——俺たちが生きているこの世界は、あらゆるものから逃げ出した先の、行き止まりのユートピアなのだ。

ならば、あるいはこの灯りは、あり得ないはずの、残された人類世界の光は——何かのブレイクスルーになりうるかも知れない。

(行つてみるか)

瑚太朗は、ごくりと息を呑み、そして足を踏み出した。

まるで魔法陣か何かのような部屋だつた。

天井や床には、同心円状に機械や光るラインが埋め込まれていて、まるで何かを守るよう、リング状の構造物が、幾重にもなつて浮遊し、重々しく、しかし縦横無尽に回転していた。

その中心にあるのは……それを吹き抜けから見下ろす瑚太朗には、棺に見えた。

人がちょうど収まるくらいの少し薄い直方体で、中央部より少し端に寄つたあたりの幅が僅かに広く、何かの蓋のようなものがついている。

そして、その棺から管かケーブルのようなものが伸びていて、壁際の何か……生化学的なガラスと鉄と計器の集積構造物に繋がれている。

よく見ると、回転するリングはCの字のように薄い切れ込みがあつて、ケーブルを綺麗に避けるようにコントロールされているらしいが、その隙間は輝く何かで充填されてい

て、それがどうやらリングの完全性のようなものを保っている……ようには感じられた。

ということは。

小太郎はキャットウォークから鉄製の無骨な階段を下り、フロアに降りると、その棺を視界に納めながら壁際の機械に近づいた。

計器のいくつかを確認してみるが、いずれも針はレッドゾーンに入つておらず、三色のランプは赤や黄ではなく、すべては青だつた。

……こいつは、生きてる。

人か、超人か、はたまた獣かキメラかサイボーグか。

いざとなれば一撃で屠るつもりで、瑚太朗はポケットからカッターを取り出し、それで腕を切つた。切り傷からアウロラが溢れ出し、それを瑚太朗はブレードに整形する。何者をも貫き、概念のレベルで切断する、それは神の力の断片だ。

見ると、回転するリングの下は、中心に近づくにつれて下り坂になつており、棺の下には、底の知れない穴になつてゐる。

どうするか。

最も外縁でゆっくり回転するリングを揺さぶってみる。最初はそつと、そして乱暴に。リングの動きは全く揺らぐことがない。

足をかけてみる。リングのスピンに足を取られそうになるが、体重を乗せても全く問題なさそうだ。

同心円状に立体的に重なってバラバラの方向に——そう見える——回転しているが、テンポよくジャンプしていけば、中心の棺にたどり着くことはできそうだ。

すっと瑚太朗は膝を曲げた。

小さく息を吸うと、一瞬、その目が回転する多重構造体を見て——次の瞬間、瑚太朗はバネのように飛び上がった。

最外郭のリングを跳ねるように蹴り、そのまま、タツ、タタツ……といくつものリングをまるで飛び跳ねる虫のように蹴上がっていく。

そして棺の直上あたりから、その瞬間だけぽつかりと空いたリングの隙間を落下し、硬い靴音とともに瑚太朗はリングの中心に降り立つた。

そのまま身をかがめると、瑚太朗の頭上を、回転するリングが通り抜けていく。
計画通り、間一髪だった。

「ふう……」

息を吐いて、瑚太朗は足元の棺を見下ろした。

棺の端の方に、小さなガラス窓がついているのがわかつた。

まるで……いや、まさに、それはのぞき窓に見えた。

やつぱりか。

瑚太朗は、かがみ込んだまま、そののぞき窓の方にそつと移動する。

曇っているかとも思ったが、温度湿度とともに、コントロールは万全らしい。

瑚太朗はそのまま窓をのぞき込んで——その瞬間、目を見開いてのけぞった。

誰かが、目を開いた。

閉じられていた瞳が、瑚太朗にのぞき込まれた瞬間、まるでそれに反応するかのように

ぱつちりと開かれ、それが瑚太朗の目をまつすぐに見たのだ。

(なん……)

その目に、見覚えが——突如、後頭部に衝撃が走り、瑚太朗の意識が飛んだ。のけぞった瑚太朗の後頭部を、回転するリングが直撃したのだ。

(しまつ……!?)

そう思つた瞬間には、瑚太朗はもう空中に投げ出されていた。

オーロラブレードは——意識が飛んだ一瞬の間に、形象崩壊が始まつてしまつてしている。

「くそっ！」

手近なリングに手を伸ばす——届かない！

姿勢はもう、落下に入つている。

視線の先には、ぽつかりと口を開ける穴と、底の知れない闇。

(まずい……!)

そう思つたときだつた。

——瑚太朗の背後で、なにか……なにかの蓋が吹つ飛ぶような音がした。

そして、次の瞬間、瑚太朗は背後から何かに引っ掴まれ、急激な加速度とともに空中に持ち上げられていた。

首をひねり、背後を見る。

そこにいたのは。

「い……委員長！？」

瑚太朗は、思わずそう叫んだ。

そう。

その姿は、背後から瑚太朗の首根っこを掴んで、瑚太朗の窮地を救つたのは——〈世界の終わり〉で千里朱音と差し違えたはずの、オカ研の仲間である委員長、此花ルチアそのものだったのだ。

だが、一瞬で瑚太朗は、それが『違う』と悟つた。

『委員長』という呼びかけに全く答えないばかりか、なにしろその、委員長らしき人間は、委員長の超振動ブレードと全く同じに見える刀を手にして、全く無表情でありながら、その——布きれ一枚も纏わない、真っ裸だったのだから。

@

@

@

とにかく村に戻ろう。

瑚太朗はそう思つたが、全裸の委員長……と同じ外見の女の子を連れて行くわけにもいかない。

とにかく瑚太朗は、街がまだ生きていた頃の記憶を辿つて、服を調達することにした。たしか、いつものヴァスコに Right-on があつたはずだ——小鳥と買い物に来たこともある店だ。

そんなことを思い出しながら、ガーディアン風祭第二支部 N109 棟の擬装された建物を抜け出し、崩壊したヴァスコの瓦礫の下から、Right-on の倉庫に潜り込むのに、もちろん彼女の超振動ブレードは役に立つた。

ヴァスコの瓦礫の山を目にして——概ね想像通りだつたが——ため息をつく瑚太朗に、彼女は言つた。

「どうしたんだ？」

瑚太朗のカーキ色の上着を羽織つた彼女のその声もまた、記憶にある此花ルチアのそれと全く同じだ。

「この先に、服屋があつたんだけどな……」

「服が欲しいのか？」

瑚太朗は肩をすくめた。

「君に上着を取られてるし、そのまま村に帰るわけにもいかないだろう」

「それなら返そうか」

「それはそれで目に悪い」

「……」

少し考えるそぶりを見せるが、瑚太朗は重ねて声をかける。

「ルチアの知識にあるだろ？」

「知識としては理解できる」

「なら、そういうことさ」

「私の記憶は、合理的ではないな」

「ま、いずれ分かるよ——切り開けるか？」

「任せておけ」

彼女はそう言うと、超振動ブレードを構えると、ヴァスコの廃墟に向かつて跳躍した。

メモリークローン、と彼女は言つた。

生物的には——此花ルチアが生体兵器ではなく生物だとすれば、の話だが——彼女は、此花ルチアと同一の遺伝子を持つてゐるらしい。

厳密にはクローンではなく、同一の生産ラインから出力された別個体ということだが、ルチアが実戦兵器として位置づけられ、それがために名前をつけられたのと対照的に、彼女はルチアのバツクアップであり、あの『棺』から外に出たことがないのだという。

しかしそれでも、彼女が言語を操り人と話し、あまつさえ動いてみせたのは、此花ルチアの記憶が知識として彼女に埋め込まれてゐることだ——。

隣を歩く彼女から、そんな説明を受けながら、瑚太朗は村への岐路を辿つていた。

「此花ルチアの記憶を収めた膨大な情報量のセル・チップが、私の頭には埋め込まれている」

ヴァスコのRight-onの廃墟から掘り出した、シックなワンピースとジャケットに身を包んで、とんとん、と側頭部を叩きながら、彼女は言つた。

「私は優秀だぞ。なにしろ私のオリジナルは学業成績優秀で、そのうえ文武両道だったからな」

「ああ、知ってるさ」

「もつとも、天王寺瑚太朗、お前とはあまり仲が良くなかったようだつたが」

「そこは引き継いでくれなくていいんだ」

瑚太朗はそう答えて笑つた。

そして——どうも、自分が悪い印象さえ与えなければ——最初から此花ルチアとは、仲良く出来ていたのかも知れない。

そう思つた。

@

@

@

雨上がりのぽつかりとした青空に、幾筋かの煙が立ち上つていた。

それを目当てに歩けば、村にたどり着ける。

森は日に日に濃くなつていき、昨日と同じ姿を見せるることは決してないが、あの煙だけは変わることがない目印だ。

もつとも、最初は瑚太朗が小鳥の元へ戻るための、純粹な道標としての狼煙にすぎなかつたのが、今ではいくつもの竈が朝に屋にと煙を上げている。

そのことに思いを馳せて、瑚太朗はなんだかほつとしたような気持ちがした。

@

@

@

小鳥のアトリエ……かつてはそうであつた場所には、いくつもの掘っ立て小屋が建てられていた。

とりあえずは雨露をしのげる、といつた程度のものだし、水浴びや手洗いは共用で——氣を遣いあつて——川で済ませるしかないのだが、それでも小屋に人が住めば、それは家だし、家族ならばなおさらだ。

その家が集まれば、その場所は群れ——すなわち『村』と呼ばれる場所になる。

その入口に立つて、アカリは目をぱちくりとした。

「こんなに人間が生き残っているとは思わなかつた」

「俺もさ」

その人数はせいぜいが二百人にも満たないが、そこには生活があつた。

畑や——誰かが農産物の種を持ち込んだのだろう——どうやら炭焼き小屋のようなものもあつた。

寒い場所では、火を熾さなければ、人は生きていけないので。

地面が掘り下げられているのは——

「あれは井戸か?」

「ああ」

わずかに、胸を衝かれたような顔を、アカリはした。

ルチアの記録が示す△破滅△と、目の前の風景を、あるいはアカリは見比べているのかも知れなかつた。

と、瑚太朗は妙なことに気づいた。

村の入口あたりの畑で、いつもなら野良仕事をしている人たちが、いない。
「どうした?」

「いや……」瑚太朗は口ごもつた。

そのとき。

「——！」

瑚太朗の耳に、何か、遠い悲鳴のような声が聞こえた。

猛然と彼女が頭を振り上げた。

「誰かが助けを求めている……！」

言うや、

「おい、ちょっと！」

瑚太朗が止めるのも聞かずに、突風のように走り出した。

△鍵△のアウロラで強化した足で、瑚太朗はなんとか彼女を追いかけた。
(広場?)

それは、小鳥のアトリエのエリアのなかでも、比較的開けた場所で、二十メートル四方ほどの空き地を囲んで、粗末な家が建ち並んでいる場所つた。
風を切りながら、瑚太朗は違和感に気づいた。

(一軒、なくなつて……！？)

否、なくなつているのではない。

瑚太朗の記憶にあつたその家は、ほとんど完全に倒壊しかけていた。人々が、その家を取り囲んで、口々に叫び声を上げていた。

男達が、今や倒れようとしている太い柱を、なんとか支えようと、必死に力を込めてい

る。

その真下には、瓦礫に半ば埋もれるように、人の影があつた。

それが、今まさに押し潰そされようとしている——！

「委員長！」

瑚太朗は咄嗟に叫んだ。

「どけーッ！！」

裂帛の気合いで、彼女がほんと滑空するかのように飛んだ。男達がはつとこちらを振り返り、突進してくるその姿を見るや、蜘蛛の子でも散らすように飛び退いた。

彼女は、彼女の剣を——超振動ブレードを両手で構えた。刃が赤く輝くのを、瑚太朗は見た。

彼女と剣と切つ先が丸太に突き刺さるや、まるで刀が豆腐を裂くが如く、丸太は真っ二つになつた。

それを認めるか認めないかのうちに、彼女は空中で姿勢を反転させた。

そして、真っ二つになつた丸太を両足で蹴り飛ばしたのだ。

広場の隅で転がつてゐる真っ二つになつた丸太は、まるで計算されたかのように、全く何にも被害を出していなかつた。

「本当に……なんとお礼を言つていいやら……」

老人が彼女に、何度も何度も頭を下げていた。

その家にいたのは、娘と孫だという。

「いいんです。私ができることをしただけで

さつと頭を下げるよ、老人は、涙を流した。

他の人々は、助け出された人たちの声をかけたり、手当てをしたりしていたが、瑚太朗達に声をかけるのは、躊躇わるようだつた。

それはそうか、と瑚太朗は思う。

身も知らぬ女性が、常識では考えられない力を個人的な振るつたのだ。

不用意に声はかけられないだろう……が。

「戻ったのね、天王寺」

よく知つた声に、瑚太朗は振り向いた。

しまこの声だが、口調は明らかに朱音だつた。

案の定、そこにいたのは、しまこと、しまこの体を借りた朱音だつた。

「ああ、ついさつき——ただいま、会長」

「天王寺、お前はいつも、面白いことを運んでくるわね——久しぶり、と言えばいいのかしら？」

朱音の声色に、アカリは首をかしげた。

「その……失礼だが、あなたは此花ルチアの知人なのか？」

朱音が、僅かに苦笑いしたように、瑚太朗は思った。

「どうでもいいのよ。そんなことは。それより天王寺、お前の連れが持っているのは、此花ルチアと同じ得物ね？」

「あ、ああ……型番とかはわからないけど、よく切れるのは間違いない」

「それなら十分。お前、此花ルチアでないのは分かるけど、名前は？」

彼女は、僅かに眉をしかめた。

「特にはない。コードネームは「L-0035」だ」

「それは名前とは呼ばないのよ」

若干呆れた声で、朱音は言った。それから、

「それなら——そうね。お前、これから此花アカリと名乗りなさい」

「アカリ？」

「そう。此花アカリ。お前はルチアではないし、そもそもルチアなんていう名前は、少し

気取りすぎだわ。ここでは、シンプルに日本語でアカリでいいでしよう」

「——」

突如つけられた名前に、彼女はどう反応したらいいかわからないようだった。

「まあ、気に入らなければ自分でなんなりと名乗るといいわ——それでアカリ」「え？」

「いきなりだけど、お前に頼みたい仕事があるのよ」

「仕事、と聞いて、彼女——アカリは、意外そうな顔をした。

「それは構わないが、何なんだ、その仕事というのは」

「最近は人が増えてきて、それはそれで人間らしい問題が出てきてね……そこで、お前の
膂力と、お前の持つ武器で——」

朱音は、ちらりと人だかりの真ん中、倒壊した掘っ立て小屋をちらりと見た。

「——家を建てて欲しいのよ」

「家？」

アカリは目を丸くした。

@

@

@

小鳥は昼間はベッドから起き上がつてこない。

ただ、陽が沈み、△村△が寝静まつた頃、小鳥は思い出したように目を覚まして、空を見上げる。

瑚太朗はそれを知つてゐるし、毎晩でもその顔を見にいきたいのだが、それをぐつと堪えるようになっていた。

やがて東の空が白みはじめ、鴉が鳴き始めると、まるで人々が起きてくるのを怖れるよう、小鳥は戻つてくる。

その気配で起きたふりをして、瑚太朗はすこしだけ小鳥と会話を交わすのだ。

今日は、そういうわけにもいなかい。

明け方、小鳥がアトリエに帰つてくる。
△村△の広場や集落からは、随分外れた場所だ。

遠くから人の気配はするが、アトリエはひつそりと静まりかえつてゐる。

「おかえり、小鳥」

「ん……」

小鳥はそう答えると、ソファベッドに突っ伏した。

瑚太朗は、わざと——しかし、わざとらしくならないように——ごそごそと毛布から出ると、ベッドから下りた。

小鳥が身じろぎをする気配がした。

いつもなら、瑚太朗はそんなことはしないのだ。

「小鳥、ちょっと聞いてほしい」

「……」

声をかけると、小鳥の返事はない。

が、話を聞いていないわけではないのが、瑚太朗には分かつた。

多分に緊張もあるだろう……が、話し続けるのが危ういような様子ではない。

「困りごとがあるんだ。最近、随分人が増えた。……それは、小鳥は、知ってるよな?」

無言。

肯定だろう。

「みんな穏やかな人たちだ。なんとかやつていてる。畑を作つて……俺もたまに手伝つたりしてさ。着るものは、まあ、当面はなんとかなる。ヴァスコから掘り出したりしてるけど」

食べるものも、着るものも、贅沢は言えない。

それでも何とかなつてているのは、要するに、現状を変える意思もあるものすべてを、△破滅△が消し去つてしまつたからに他ならない。

最早ここは、世界の終りなのだ。

だが。

「だけど……住む場所だけはどうにもならない。ベニヤ板を拾つてきて、何とかしてみているけど……丸太で補強した家が、今日崩れた。やっぱり、ちゃんとした家を建てる必要があるんだ」

瑚太朗は敢えて、この小鳥のアトリエについては、言及しなかつた。

△村△のひとは、この小屋のことを知つても、ここで雨風を凌ごうとはしなかつた。

小鳥と瑚太朗がしたことを、明瞭に知つてはいなくても、しかし、この場所が異様な場所であることは、一目見て分かる。

ここで何かが行われたのだと、誰もが察している。

その結果として、このアトリエだけが——おそらく地球上でただひとつの一一人が住みうる場所として残っているのだ。

「なあ、小鳥。俺たちは、家を建てる必要がある。今日、またひとり、生き残りを見つけた。そいつが森を切り開けると思う。材木も手に入る。でも、俺たちには、家の建て方が分からぬ」

瑚太朗は、少し間を置いた。

「たしか、小鳥の部屋に、ログハウスの建て方の本、あつたよな。あれを、貸して欲しい」

何を言うのか、見透かされていた気がした。

それは、小鳥の濫読の一環として、『鍵』の本質たる樹木に、人類がどのように立ち向かい、手懐け、利用してきたのかという、その歴史の一巻として、小鳥の書庫にあつた。

……答えはない。

「キツいときに、ごめん。でも、小鳥の部屋に入るなら、小鳥に黙つて行くわけにはいかない。許してもらえるなら、俺ひとりで行くし、他のものは何も触らない」

小鳥の答えはない。

まあ、急な話だ。

話すべきことを話し終わると、瑚太朗は少し気が楽になつてしまつた。

黙つてやつてしまえばよかつたのかも知れないが、気が引けた。

それは瑚太朗の利己心かも知れなかつた。その自覚はあつた。

「……考えてみると、嬉しい。でも、忘れてもらつても、構わない。勝手にはしないから

それから、付け加えた。

「ごめん」

そう言つて、瑚太朗は小鳥に背を向け、一步足を踏み出した時、

「待つて」

瑚太朗は息を呑んだ。

が、その気配を出さないように努めた。

「ん」

肯定だけして、あとは小屋の外の音を聴くことにした。

木々がざわめく音が——＼破滅／のあの森の、風にそよぐ音、木々に水が流れる音、そして異様な速度で木々が生長していく音が——聞こえた。

虫たちも鳴いている。季節は秋に落ち着きつつあるらしい。

そして、小鳥が身じろぎをする音。

「……ふしだらNG」

「そうだな」

「瑚太朗君、あたしの部屋に入つたら、ふしだらな事しそうだから」

「かもな」

「だから、あたしが見張つてないと、ダメ」

その声の低さに、瑚太朗は意思を感じた。

「そつか」

間があつて、

「うん」

行く、という声だった。

「ありがとな」

「でも、今日はもう眠い。起きたら行こう」

「わかった」

小鳥が起きるのは、夜になる。

それは瑚太朗も、分かっていた事だつた。

@

@

@

た。

世界は遍く森に呑まれてしまつたが、小鳥のアトリエは『破滅』の前の原形を保つてい
が既に存在していたことの方が大きいだろうと瑚太朗は思つていた。

理由はいくつか考えられるが、『破滅』の爆心地であった事より、むしろガイアの術式
が既に存在していたことの方が大きいだろうと珊瑚は思つていた。

小鳥の家の周囲だけは、なぜか『森』に呑まれず、ごく普通の——というには進行が早
い氣もするが——荒廃の仕方をしていたからだ。

森を抜けると、まんまるな月が頭上に輝いていた。

不思議な光景だった。

この一区画だけが、まるで、普通の廃墟みたいだった。

「不思議」

小鳥がちいさく呟いた。

「まるで、何もなかつたみたい」

人の気配も、街灯や窓の明かりも、なにもないのだから、それだけでも「何もなかつたみたい」なはずがない。

瑚太朗は妙におかしくなった。

ただ、小鳥の言っている事も、わかる。

『村』はもう、かつての文明世界とは全く違う生活を作り上げつつある。

畑を耕し、獣を狩り、粗末な小屋に住むその光景は、まるで原始時代だ——というのは言い過ぎだろうが、と瑚太朗は口の端で小さく笑った。

——しかしここには、かつて文明世界があつたことを示す、建物があり、道路があつた。

それは、残り滓というより、残り香のように瑚太朗は思えた。
かつて俺たちは、ここで生きていたのだ、そのことの証拠。

神戸家は、かつて小鳥の両親を魔物に転用して以来、荒れ果てるままになつていた。
もちろん他の家だつてそのはずだが、小鳥はこの家の大部分を——やむなくとは言え——
意図的に放棄したのだ。

そのことの違いが、恐らくは小鳥にとつて重大なことだろう。

小鳥から鍵を受け取ると、玄関の鍵を開け——そんなことをするのは、いつ以来だろう
——中をのぞき込む
魔物の気配はない。

リトルフオレストの結界が、今も有効に働いているのだろう。

小鳥がスリッパ立てから二組のスリッパを取り出すと、床に静かに置く。空気に押されて、ぱふ……と埃が僅かに舞つた。

「どうぞ」

「ありがとう」

しぜん小さく声を交わし、家に上がる。

小鳥の部屋は二階だ。

階段を上ると、ぎしりと木が軋む音がした。

その小鳥の部屋に、瑚太朗は二度三度、上がつたことがある。

壁一面のスライド式本棚に、みっしりと並べられた、本、本、本。

『医学、地理学、地質学。郷土史、植物学、民俗学。ガーデニング、生物学、生態学、

動物学……』

かつて彼女は、歌うようにそう説明してくれた。

その、『ガーデニング』のあたりに、その本はあつた。

『ログハウスを建てよう!』

瑚太朗は、ちらと小鳥を見やつた。

「いいか？」

小鳥が黙つて頷いた。

瑚太朗は『ログハウスを建てよう!』に手を伸ばす。

ぱらぱらとめくると、場所の選び方、地ならしのやり方、木の選び方、加工の仕方、丸太の組み立て方……ひとつおりの方法論が載つているようだつた。

そこに載つている写真は、小鳥のアトリエの小屋に造りが似ていて気がした。

おそらく小鳥は、この本を元にして、魔物に建てさせたのだろう。

ふう、と瑚太朗は一息ついた。

アカリの超震動ブレードと腕力があれば——もちろん、瑚太朗自身の膂力もだ——魔物はいなくとも、家を建てる事はできるだろう。

@

@

@

△村△に帰つてきてもなお、夜は半ばだつた。

もちろんそうだ。

遙かに隔絶してしまったとはいへ、物理的な距離は、知れているのだ。

村の広場に、アカリが待っていた。

満月を背に煌々と照らされるその姿を見て、小鳥は立ち竦んだ。
アカリのことは道すがら話してはいたが、その姿は、かつての此花ルチアと瓜二つだった。

アカリは、立ち竦む小鳥と、そばに立つ瑚太朗のところまで、ゆっくり歩み寄る。逆光
だが、柔軟な顔だと分かった。

「神戸さん、私は此花アカリという。先日からこの『村』で世話になつていて……微妙な
ところだが、はじまして、よろしく」

小鳥の唇からなにかの音が漏れた。

「ああ、大丈夫。無理に話さなくていい……天王寺、本は？」

「見つけた。これだ」

ちらりと小鳥を見てから、瑚太朗はアカリに『ログハウスを建てよう!』を手渡した。

受け取つて、ぱらぱらとめくつて、アカリは、大きく頷いた。

「うん、これなら何とか建てられそうだ。沢山の人が助かる。神戸さん、ありがとう」
その言葉を聞いた瞬間、小鳥が、ふらり、とよろめいた。

「小鳥！」

瞬時、瑚太朗が抱き留める——目眩、だろうか。

「悪い、アカリ。俺は小鳥を連れて行く。また後で」

「分かった」

アカリはそれだけ短く言うと、さらりとその場を去つていった。
表情が、しまつた、と語っていた。

小鳥は、声もない。

「行こう」

瑚太朗は、身をかがめると、小鳥の肩に腕を回した。

小屋に戻つてくると、小鳥はそのままソファベッドに倒れ込んだ。
緊張していたのだろう。

それはそうだ。

『破滅』以来、はじめて『村』の外に出たのだ。

しかも、他の誰かのための知識を手に入れるために、だ。

そしてアカリのあの言葉。

小鳥は、突っ伏したまま動かない。

瑚太朗は、努めて冷静にしようとした。

「お疲れ、ごめんな……おやすみ、小鳥」

その声は震えていなかつたと思う。

@

@

@

数日後。

小鳥はまた、夜になると起きだしてくる。

普段は、瑚太朗が入れ替わるように床につく。

——今日は、渡すべきものがあつた。

瑚太朗は、机から一葉の紙を取り出した。

改めて中身を確認すると、椅子から立ち上がり、ソファベッドに突っ伏している小鳥に近づいた。

「なあ、小鳥」

「ん」

小鳥は顔を上げた。

神戸家への往来からこちら、さすがに小鳥は疲れているのか、言葉少なんだつた。が、少しだけ……ほんの少しだけ、表情がよくなつた、ような気がする。

それとも、自分のほうを見て話してくれている、ような気がしているのかも知れないが、実際には分からぬ。

小鳥の横顔を確認してから、瑚太朗は、

「これ、手紙」

そう言って、手にした紙を差し出した。

「……？」

小鳥は少し怪訝な顔で、しかし半ば反射的に、それを受け取つた。

「ログハウスの第一号に入った、シマさんから……大丈夫、変な事は書いてないから」
一瞬目がきゅっと細くなつたのを見て、瑚太朗は付け加えた。

「ありがとうって言つてた……この前、シマさんの小屋が崩れてさ、他の小屋に間借りしてたんだ」

アカリが『村』にやつてきた日に倒壊した、あの小屋だつた。

なんとか難を逃れて、今日はじめて完成したログハウスに入居したのだ。

ほとんど実用試験を兼ねての事だが、シマ老人は同意してくれた。

これは老人の仕事だ、と笑つて。

「まあ、気が向いたら読んでみればいいと思う」

曖昧な言葉を瑚太朗は口にした。

無理をしてすべきことじやない。

『ログハウスを建てよう!』みたいな、今差し迫つてゐる問題があるわけではないのだ。

……それでも、期待めいたものは、瑚太朗にはあつた。

「それじや、俺はちょっと、向こうにいるから」

そう言つて、瑚太朗は隣の部屋に引っ込んだ。

@

@

@

しばらく雑用をこなして、それから瑚太朗は夕食の準備をした。
獣の干し肉と、雑穀と根菜の粥。

代わり映えしない、いつもの献立だ。

が、ふと瑚太朗は思い立つた。

裏の畠に出て、小さな菜園の様子を見た。

水菜もリーフレタスも、悪くない。

そつとちぎつて、口にしてみる。

おいしい。

瑚太朗は思わずにつこりとした。

二人分のささやかなサラダを作ると、瑚太朗はその一皿を持つて、小鳥の様子をそつと伺つた。

小鳥は、ソファベッドにいつものように突つ伏していた。

その枕元に、シマ老人の手紙がそつと置かれていた。

おそらく、少なくとも、読み始めはしたように瑚太朗は感じた。

そして、小鳥の肩が、時折ちいさく震えている。

瑚太朗は、声をかけることにした。

「小鳥、大丈夫か？」

返事はなかつた。

が、突つ伏したまま、小さく首を縦に振つた……ようく瑚太朗には見えた。

そこに迷いは感じられなかつた。

「わかつた。……サラダを作つた。テーブルに置いておくから、食べてもいいよ」

それだけ言つて、瑚太朗は、少し散歩でもしてこよう、と思つた。

@ @ @

少しだけ心が落ち着いた頃、小鳥はのろのろと顔を上げた。
一度泣いてしまうと、おなかがすく感じがした。

そういえば、瑚太朗君が、何か置いてってくれたのだったか。
小鳥はサイドテーブルの方に目をやつて、

「あ……」

声にならないような音が、喉から漏れた。

それはいつか、瑚太朗に話した事があつたレシピだった。

『リトルフォレスト……何号だつたつけ？　これ、食べられるのか？』

『人間をやめることになつてもいいなら、消化はできますぞ』

『こわ！　めっちゃこわ！』

『瑚太朗君、サラダ好きだつたつけ？』

『いや……でも、なんか美味そうに見えてさ』

『それなら、こっちのレシピが人間向けだよ……』

そんな会話のことを、小鳥は今まですっかり忘れていた。

でも、瑚太朗はずつと、覚えていてくれたのだ。

恐る恐る、小鳥はフォークに手を伸ばした。

そして、緑のそれをすこしだけ掬い、そろそろと口に運ぶ。

おいしい。

おいしかった。

そう思つた瞬間、小鳥の目に、また涙があふれてきた。

「どうして……」

それだけを口にして、小鳥はベッドの上にうずくまつた。

分からなかつた。

私が△破滅△を連れてきたのだ。

私のせいで、こんなことになつてしまつたのだ。

ずっとそう思つてきた。

それなのに。

どうして、みんな、そんなに優しいのか。

その答えを自分で知っているのか、知らないのか、それすら知らないまま、小鳥はうずくまつたまま、泣き続けていた。

@

@

@

しばらくの時が流れた。

@

@

@

こんな世界の終りでも、季節は巡る。

厳しい冬を——何人かの脱落者を出しつつも——なんとか越え、いくらか肌寒くあつても夏を過ぎた頃。

畠仕事からの帰り道、瑚太朗は見知った顔を見つけた。

「アカリ、元気か？」

「見ての通りだ」

アカリは薪割りをしていた。

手に持っているのは、超振動ブレードではなく、シンプルな斧。その光景も、だいぶお馴染みになっていた。

「薪、足りそうか？」

「去年と同じくらいは。でも、もっと寒くなついたら足りなくなる」「また斬りにいかなきやならないな」

「そうするつもりだ。何人かとは話をしている」

アカリはそういって、空を見上げた。

青い、高い空だ。少し高台になつてている場所では、特にそう見える……眼下というほど

「アカリにいてもらつて、本当に心強いよ」

「褒めても何も出ないぞ？」

「そんなつもりはないさ」

「それならいい……家に帰るのか？」

「ああ」

「それじや、小鳥によろしくな」

アカリはそう言って、仕事に戻る。

坂を下ると、用水路のところに腰をかけて、シマ老人が空を見上げていた。
ログハウス第一号の住人だ。

「瑚太朗君」

「シマさん……いい天気ですね」

「ああ……」

なんとはなしに、隣に腰掛ける。

「いい天気か」

シマ老人は、瑚太朗の言葉を、小さく反復した。

「どうかしたんです？」

「いや……」

言つて、老人は息を吸い、そして吐いた。

「どうも、年をとつたせいか知らんが……去年より、寒いような気がしてね」

「それは……アカリも言つていました」

「アカリちゃんが言つているなら、年のせいでもないし、その他のせいでもないな」

老人が笑つた。

アカリがガーディアンの人工生体兵器であることを、老人は知つていた。

この老人は、もともとガイアの魔物使いだつた。

この村の人口は、数百人で止まつたが、その中には、ガーディアンも、ガイアもいた。ただ、皆、穏やかな人々であることは共通していた。

「……やはり、寒くなっているんじやないかね？ 瑞太朗君」

その問いに、瑞太朗は少し黙り込んだ。

農作業の都合上、気温の記録はずつとつけていた。

確かに今年は、去年よりも随分と寒い。

それが短期的な現象なのか、長期的な現象なのかは、少なくとも数年単位で観測してみないとわからないが、△破滅△が逕効性の世界の終りをもたらそうとしているとしても、不思議ではない。

瑚太朗が黙り込んだのを見て、老人は何か察したようだつた。

「何か、考えなけりやならないかね……」

そう言つて、老人がまた空を見上げ、瑚太朗もつられるようにして倣つた。
空の青が、さつきよりも少しだけ、冷たいように、瑚太朗は思った。

@
@
@

その夜。

暖炉に火を入れるにはまだ随分と早いが、瑚太朗も小鳥も、もう冬物を着るようになつた。

その服も、そろそろ自分達で作らねばならない。

小鳥は椅子に座つて、セーターを編んでいた。

その背後の本棚には、かつて神戸家の小鳥の家にあつた、たくさんの書物が並べられて
いる。

智慧で人を導くのがドルイドだとするなら、小鳥はこの△村▽の、間違いなくドルイド
だつた。

「ねえ、瑚太朗君」

「うん」

瑚太朗は、読んでいた本から顔を上げた。

最近瑚太朗は、ヒトが集団で生きる術……というようなものを好んで読んでいる。
勉強が出来るわけではないから、難しいのだが。

「今年は、ちょっと寒くなりそうだね」

「ああ……不思議だな、今日その話をするのは三回目だ」

「そうなの?」

「アカリと、シマさん」

「あの二人か……」

小鳥の表情が、わずかに真剣味を帯びた。

「厳しい冬が来そうなのか？」

「たぶん。アウロラの残滓が、だんだん冷めてきてる感じがして」

そのことの意味は明瞭にはわからなかつたが、単語からすると深刻だ。

「で、どうするのかしら？」

しまこ……ではなく朱音が言つた。

今までこの部屋には、瑚太朗と小鳥しかいなかつたはずなのだが、その神出鬼没さに、二人は慣れきつてているようだつた。

「……」

小鳥が答えないで、瑚太朗が口を開く。

「もつと薪をとつてくる？炭焼き小屋も増やすとか」

「原始人ね」

「悪くないとは思いますが」

もちろん朱音も分かつて言つてゐるのだ。

「……それで済むかな」

小鳥が、ぽつりと言った。

「どういうことだ？」

「星がどんどん寒くなつていくとしたら、もしかしたら、それだと……」
語尾は宙に消えたが、意味は十分に伝わつた。

「朱音さんは、その話をしに？」

「聞きつけたのよ。いずれ話す事だと思うし」

「何かいい手が？」

「いいかどうかは知らないけど、手はあるわね」

その言い方に、瑚太朗は僅かにひつかかりを覚えた。
と、小鳥が口を開いた。

「それは……朱音さん、どんな方法なんですか？」

@

@

@

朱音としまこが帰つて、随分と遅い時間になつていたので、瑚太朗は諸々の片付けをして、ベッドに入った。

どうにも眠れなかつた。

朱音が話したプランが、脳裏にこびりついている。

小鳥が同じ事を考えてはいた、ということも。

朱音のプランは、この△村▽全体を、巨大な魔物で覆つてしまふということだつた。クラゲかバルーンか、ともあれそのような透明な薄膜で覆い、寒さを凌ぐという手段だ。

冬の間はそれで雪も寒気も凌ぐ。

本当に恐ろしい冬が来るならば、雪は人の命を奪う。

去年は初雪を喜んだりもしたのだが、そんな呑気なことを言つていられる状況ではないかも知れない。

だが、魔物である以上、その膜は魔物使いの命を吸う。

この世界では、高度な技術は命と引き換えなのだ。

そのことを、瑚太朗は——自分が魔物使いでないから、より一層——考えないわけには行かなかつた。

そんな事を考えていると、ふと、小鳥の気配がした。

「小鳥」

呼びかけると、小鳥は瑚太朗のベッドにそつと腰掛けた。

横になつたまま、瑚太朗は小鳥の言葉を待つた。

「……ごめんね、心配かけて」

「謝る事じやないさ。生きていくためには、色々考えなきやならない」

「ありがと」

少しほつとしたような声だつた。

「怒られるんじやないかと思つて。なかなか言い出せなかつたんだ」

「そうか？」

「そうだよ」

「まあそれは……」瑚太朗は少しだけ考えた。「どんなつもりかは、声に出る。もし、よくないことを考えていたら怒るけど、小鳥はそうじやないだろ」

「……」

沈黙は、肯定だろうか。

「なあ、小鳥」

「うん」

「俺たちは、ずっと小鳥に助けられてきた。ログハウスから始まって、畑だって、炭だって。全部小鳥に教わった事だ」

「ただの知識だよ」

「それでも、それがなけりや、俺たちはやつてこられなかつた。だから、みんな感謝してる」

「それを言うなら、あたしだつて……瑚太朗君がいなかつたら、」

小鳥は言葉に詰まつた。

「……ここまで、やつてこられてないよ」

「それなら嬉しいんだけどな」

でも多分、本当にそうなんだろう。

そのことを瑚太朗は知っていた。

「それに……俺は、小鳥にいてもらわなきや困る」

「……」

「……だから、自分でやる、なんて言わないでくれよな」

口にすべきか迷ったその言葉を、瑚太朗は口にした。

一年前なら、とても言うべきではないと判断していたかも知れない。

でも、今ならその言葉が届くような気がしたのだ。

答えはない。

が、悪い沈黙ではない気がした。

「……ごめんね、答えられなくて」

「いいんだ。簡単に出せるものでもないし……小鳥さんも、あんまり遅くなんないうちに

寝なさいよ」

「そうだね、あんがと」

瑚太朗が茶化すと、小鳥も言葉を返す。

今はそれで十分だと、瑚太朗は思った。

@

@

@

「――たとえば私なら、私がやります、とは言えないよ」

小鳥の問いに、アカリは、静かに優しく、言った。

△村△を見下ろす丘の上である。

「人間だからな、そんなものさ。自分の命を差し出すなんて、怖くてできない。恐ろしいじやないか。それが普通だ」

「此花さんでも、そうなんだね」

「そりやそうだ。神戸さんは一体、私の事をなんだと思ってるんだ?」

呵々大笑して、アカリはそう言つた。

「私は私にできることをしたいが、正義の味方でもないし、誰かのために犠牲になりたいわけじやない。そんなことは、つまらないからな」

「つまらない、か……」

「そう。せっかく生きているんだ。楽しく生きたい。私はこの一年で、そう思うようになつた。……意外か？」

少し、間があった。

「此花ルチアさんなら、違う事を言つてたかも」

「あいつは、以前の神戸さんに似ていたからな」

アカリは、ルチアの記憶を参照したのだろう。そんなことを言つた。

「それに、今、神戸さんがいなくなつてしまつたら、皆困つてしまふ。そうだろう？」

「……うん」

事実として、それはそうだ。

小鳥の知識は、△村△を支える重要な柱のひとつだつた。

「そんな人を、生きるための人柱にするなんて、本末転倒だ。みんな止めるだろう」

「そつか……」

「念のため言つておくが

アカリは、少し強めに言つた。

「それは罰じゃない。ましてや罪なんかじゃない。それは単純に、希望とか未来とか、そういう呼ばれるものだ」

その言葉に、小鳥は、胸が詰まる気がした。

希望、未来。

この世界の終りにあって、そんな言葉を聞くのは、ひどく不思議な気分だった。だが……小鳥はその言葉に、ひどく心を動かされている自分に気づいた。

それを見たか、アカリは、につこりと笑った。

「……神戸さん、ゆっくり考えよう。大丈夫だ。私たちは一人じやない。みんなで考えよう。こういうのは、皆で背負っていくものなんだから」

@

@

@

「要するに、覚悟がつかないなら、やめておきなさい、ということ」

朱音の言葉は辛辣だが、その口調は、呆れの中に真摯さがある……と小鳥は思った。

「命に替えるも……とか、自分より大切なものがあるとか、そういうことはまあ、あるわよ。世の中には色々な人間がいる。でも神戸、お前は今、そうじやないんじやないのかしら?」

「……そうですね。本当に」

小鳥は、苦笑いした。

「私はこんな状態だから、人に『聞いた』話ばかりだけだね。例えば、親が子供に対しても、そんなことを思う事もあるみたいだわよ。でも、男女関係でそうなるのは、はつきり言つて勘違いの事が多い」

「男女関係は別にして」

『ふしだらNG』?まあそれはいいわ。とにかく、人が命を賭けるなんて、ほんとないことなのよ。そう言つている連中の99.99パーセントは、ただの自暴自棄』

じろり、と朱音は小鳥を見た。

「しばらく前なら、お前もそう言つたかも知れないわね、神戸。でも、今はそうじやないでしょう」

「はい」

明瞭な答えだつた。

満足げに、朱音は頷いた。

「なら、立候補なんてしなくていいのよ。いえ、する権利がないと言うべきかしらね」

「厳しいですね、朱音さんは」

『聖女』にして『魔女』なのよ、私は。そこらの人間と一緒にしてもらつては困るわ
そのアカリと対照的な言い方に、小鳥は思わず笑つた。

「何かしら?」

「いえ……でも、ありがとうございます。少し考えが纏まりました」

「それならよかつた。もう一つ……この件で、色々考えてくれているのが、何人かいるみ
たいね。相談に来るかも知れないから、その時はよろしく頼むわね」

「はい」

それは有り難い事だと思う。

朱音さんがサポートしてくれるなら、百人力だと思つた。

⋮

その『何人か』が、小鳥と瑚太朗、そして朱音の元を訪ねてきた夜。

朱音は早々に帰ってしまい、瑚太朗と小鳥は、暖炉の火に当たりながら、考えにふけつていた。

主に、年嵩の魔物使い達だつた。

そのなかにいたシマ老人は、最後に言つた。

『実は、魔物使いが平等に命を使うとか、そうでない村人からも命を平等に……吸うだとか、そんな案も出たのです』

瑚太朗はその口調を思い出し、言い表しようのない重みを感じた。

『ですが、それは平等といいながら、老いも若きも、健康な人間も病気の人間も……人は皆同じではない。それぞれの事情は分からぬ。それが火種にもなる』

『だから……あなたたちが……』

瑚太朗の言葉に、シマ老人は頷いた。

『命は受け継がれるものです。命とは、最初からそういうものだと、そういうもののなのだろうと、私たちは思つたのです』

そうなるのではないか、と瑚太朗は最初から思っていた。

だが、それは言葉を換えれば『姥捨山』だ。それは、ひどいことだった。
簡単に頷く事は出来なかつた。

それを知つてゐるのだろう。シマ老人はすぐに答えを求めなかつた。
考えておいて欲しい、と言い残して、彼らは去つて行つた。

「ねえ、こたさんや」

「なんだい小鳥さんや」

「……どうすればいいんだろうね」

「そうだなあ……」

瑚太朗は、天井を見上げた。

それから、すつと真面目な顔になると、小鳥の顔に視線を合わせた。
小鳥が少し驚いたような表情をする。

「なあ、小鳥。俺がこれからするのは、ひどい話だ。だけど、嫌わないで欲しい」

「……うん」

「俺は、シマさんが持つてきてくれた案なら、どれでもいいと思つてゐる」「どれでもいい？」

それは小鳥にとつて、意外な言葉だつた。

瑚太朗には、なにか考へがあるのだろうと思つてゐたからだ。

「もちろん、いい点悪い点はある。でも、ベストな案はない。だから、どこかのマイナスは受け容れなきやならない。でも、どの案でも、俺が一番重要だと思う点は、担保されてゐるんだ」

「重要だと思う点？」

「ああ」

瑚太朗は、静かに——僅かに悲しそうな顔だらうか?——笑つた。

「それはな、小鳥、お前一人が犠牲にならないつて点だ」

小鳥は、目を見開いた。

「ごめんな。でも、俺にとつては、それだけが一番重要で、それ以外は、二の次だ。もちろんみんなのために、勉強もするし考へるけど……」

手にした政治学の教科書を、瑚太朗はひらひらと振つた。

「……結局俺はエゴイストなんだろうな。他の誰かを犠牲にしても、俺は小鳥に生きていって欲しい。俺は……小鳥は嫌かも知れないけど、それで

、

瑚太朗の言葉が、止まつた。そして、ゆっくりと、最後の言葉を紡いだ。

「それでひどい目に遭わせたけど、それでも……俺は小鳥に生きていて欲しい」

おそらく、△破滅△のことを言つてゐるのだ。

小鳥には分かつた。

あのとき瑚太朗がなにもしなければ、単純に世界は滅んでいた。
いつそその方が、小鳥は楽だつたかも知れない。

だけど、それを、瑚太朗は、自分のエゴで……小鳥に生きていて欲しいと願つたのだ。
自分の顔が、くしやりとなるのが、小鳥には分かつた。

そして、言葉を絞り出した。

「それは……あたしには、とても言えないなあ……」

そして、小鳥はその自分の言葉に、きゅつと目を見開いた。

自分なら絶対に言えない事を、瑚太朗君は私に言つてくれたのだ。

それは、なんという……

「うう……」

突然、小鳥はぼろぼろと涙をこぼした。

「こ、小鳥！？」

瑚太朗が狼狽えた。何かまずい事を言つただろうか。

「大丈夫」

「でも……」

「大丈夫だから……」

小鳥はぼろぼろと、泣き続けた。

これは、嬉し涙なのか……小鳥はそう思つた。

それは分からぬ。

だけど、ひとつだけ分かる事がある。

この涙はきっと、あのときから——死にかけている瑚太朗を△助けた△ときから——引きずり続けた涙だつたのだ。

@

@

@

冬が来る前に、△繭△は完成した。

小鳥を始め、魔物使いたちが寝る間を惜しんだ成果でもあるが、しかし、それも、この魔物を使うことを決めてくれた人々がいるからこそなのだ。

その人々が、高台の丘に集まっていた。

やがて老人が魔物と接続すると、空中に折りたたまれていた半透明の膜の集合体は、ぱたぱたと折り紙を広げるよう広がつていき、いくらもたたないうちに、しっかりと街を覆つた。

「見事なものだな」

アカリが言うと、朱音が

「当然よ。私が手伝っているのだから」

「皆の力だな」

「ま、そういうことにしておくわ」

朱音が肩をすくめた。

式典が終わり、解散となつても、瑚太朗と小鳥は、丘の上で『蘭』を見上げていた。

「ありがとうな、小鳥」

「いいんだよ」

小鳥はにっこりと笑った。

「みんなで決めた事だし、やつぱり、この『村』の人たちは優しいねえ」

「世界の終りにも、いいことはあるか」

「ま、そうかもねえ……」

小鳥があまりにも自然に答えたので、瑚太朗はかえつて驚いた。

そんな言葉が出てくるなんて、思いもしなかったのだ。

「ま、油断してると、いつのまにか、あたしたちの番になつたりして」

「それが先である事を祈るな」

「ま、まだまだ若いからね、あたしも、瑚太朗君も。それに……」

冗談っぽく言って、それから小鳥は、ふと付け加えた。

「いざれ私たちがその役を担うにしても、今はここで瑚太朗君と生きていたいよ……なん
つって」

にへら、と笑つて、小鳥は瑚太朗のほうを見て……そして、

「え、こ、瑚太朗君！？」

瑚太朗が、ぼろぼろと涙をこぼしていたのだ。

「ちょっと、あんさん、どうしたのさ！？」

「何でも……なんでもない……」

そんなはずはない、と思ったが、その理由が小鳥には分からなかつた。
だが、悪い涙ではない、ということは分かつた。

小鳥は、少しだけ迷つた。

でも、その迷いは、本当に少しだけだつた。

だから小鳥は——顔を上げた。

そして、おずおずと、ゆっくりと……その手を、瑚太朗の背中に伸ばした。

everything you've ever dreamed

『冬』がやつてきてなお、しかし季節の移ろいというのはある。

今は秋だ。

秋の夜はもう随分と厚着をしなければならないが、小鳥はふと、夜空を見上げたくなつた。

瑚太朗を起こさないように、慎重に、小鳥はベッドを抜け出した。

夜空には月が輝いていた。

それは『繭』の薄い膜を通してだから、すこしだけぼやけて、ゆらいで見えた。

小さな星々を夜空から消し去つてしまふよう、そんなくつきりとした月明かりの下――
彼女が立っていた。

おもわず、小鳥はにつこりとした。

そして声をかける。

「おひさしぶり、篝」

まるで古い友人に会うかのような、軽やかで、心弾むような声だった。

@

@

@

二人は、庭のベンチに並んで腰掛けっていた。
篝は小鳥たちの状況のことをよく知っているようだつたが、篝に訊かれるまま、小鳥は自分たちのこと話をした。

『村』のこと。『蘭』のこと。瑚太朗のこと。そして、自分のことを。
ひととおりの近況報告が終わると、

「私は不思議です、小鳥」

篝は無表情のまま、抑揚もなく言つた。

「不思議？」

「はい。星のアウロラが枯渇して、『破滅』のせいで『森』が世界を覆い、『冬』がやつてきた。人類はもうほとんど残つていなくて、『蘭』のなかで滅びに瀕している。それなのに――」

すっと篝が小鳥の方を向いた。

「どうして小鳥は、そんなに幸せそうなのですか。この世界はもう、終わっているというのに」

その問いを聞いて、小鳥は確信した。

世界が終わりつつある事は、篝にとつては、重大なことのはずだ。

それなのに、こうも——そうだ、これは——客観的なのは、その理由は。

「ねえ、篝」

「なんでしよう」

「あなたは、どこから来たの？」

篝は、眉をひそめた。

「本当に理解できません。そのことを理解してなお、小鳥、あなたは幸せそうだ」

「そうだね……」

小鳥は静かに目を閉じた。

「いつも、夢を見るんだ。昔の夢。まだ、篝に会う前の頃の夢……」

@

@

@

いつもあたしは、寂しそうな顔をしてた。

篝と出会う前なんだから、きっとそれは、私の本質的な性格なんだらうなつて。人と違うって思つて、人と話をしないのに、寂しがり。

それはまあ……そりやそうだよね、って今では思うけど。

@

@

@

「だけど、その夢を見るたびに、あたしは、あたしがどんな人間だったのか、よく分かる気がする。だから、今を大切にできる。つまり——」

「——夢も現実の一部だ、と」

理解早い。小鳥は笑つて頷いた。

「そう。だから、もしこの世界が誰かの夢だとしても……その『誰か』が」小鳥は、篝に向かって少し微笑んだ「この夢を覚えていてくれるなら、それは現実つてことなんだよ」

「——」

「話を戻すとね、篝。あたしは、今結構、幸せだよ。明日生きていくことだけ考えていいれるし——それに、瑚太朗君と一緒にいられる」

「瑚太朗も——幸せなのでしょうか」

「うん。間違いない」

その言葉が自然に出てきて、小鳥はひどく納得した。

「だから篝、あなたが覚えていてくれると嬉しいな。瑚太朗君とあたしの幸せは、そう……あるんだつていうこと。そのかたちをさ」

@

@

@

「そろそろお別れの時間です」

篝はそう言うと、すっと立ち上がり、数歩歩くと、小鳥の方を振り返った。

ちょうど、月明かりにまっすぐに照らされて——いや、おそらく篝自身も月のようになわづかに輝いているのかも知れなかつた。

「さよなら、篝。瑚太朗君によろしくね」

「はい」

嘘はなさそうな言葉だった。

それから小鳥は、訊いた。

「ねえ、この世界は、あとどれくらいなのかな」

「わかりません。アウロラが完全になくなれば、誰も気づかぬうちに——苦痛はありません」

「まだ、しばらく大丈夫かな」

ふと、篝は考えるようなしぐさをした。それから、答えた。

「はい、きっと」

「……ありがと」

「それでは」

言葉と同時に、篝の姿が、すっと薄れはじめた。

薄れたまま、小鳥の目から遠ざかり、しかし——その姿はどんどん大きくなっているよう見えた。

やがて、篝の黒いビロードのドレスが、赤いリボンが、夜空に溶けていき、小鳥はほとんどそれを見上げるようになっていた。

そして最後に、篝の大きな顔が、まるで——水槽の金魚をのぞき込むような思案の顔を残して、そのままふっと夜空に消えた。

(終)

あとがき

お世話になつております。鶏卵工房の瀧川新惟です。前回に続いた、Rewrite、瑚太朗と小鳥のお話を届けました。前回が本当に短い本だったので、この長さのお話は、一年半ぶりですね。

今回の話は、以前に作った同人誌「終末は巡る黄金の秋」の「"G"線上のアリア」「たつたひとつの冴えたやり方」と、「彼方の待ち人」の間に位置する話です。今まで、Rewrite の、瑚太朗と小鳥の話は少なからず書いてきましたが、ようやく今回で、きちんととした一人の話を書けた気がしています。楽しんで頂ければ幸いです。

次回予告ですが、Rewrite の「一次創作もこれで一区切りかな、と思つてるので、できれば、総集編みたいなものを次のイベントで出したいなあ……と思つています。

110110年十月二二日

瀧川 新惟

鶴卵文庫

"Rewrite" epilogue (another)
"one more kiss, one more love."

2021年10月23日 初版第一刷発行

- 著者 潤川新惟
- 原作 Key/Visual Art's
- 製作 サークル鶴卵工房

発行人：潤川新惟

a.takigawa@lostwinter.info

発行元：サークル鶴卵工房

<http://lostwinter.info/>